

6 防除対策推進上の問題点及びその対策

農作物名	病害虫名	問題点	対策
水稲	トビイロウンカ	<ul style="list-style-type: none"> ・早植圃場での坪枯れ被害が多かった。 ・イミダクロプリド、スタークル、エチプロール+イミダクロプリド等の育苗箱剤で効果不足なものがみられた ・8月5半旬～9月1半旬の降雨により適期防除ができなかった ・品種では、県北部の「にこまる」は熟期の関係で6月上旬植えてあり、同時期植えの「ヒノヒカリ」に比べ坪枯れの発生が多かった。 ・無人ヘリ防除において臨機防除できる体制整備ができていない。 ・無人ヘリ防除での散布条件の悪いところで効果不足の事例がみられた ・ブプロフェジン剤の効果に疑問が持たれる事例がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・薬剤感受性の把握（特にブプロフェジン剤）。有効薬剤の開発。 ・無人ヘリ防除において臨機防除できる体制整備。 ・生産者段階における圃場単位での発生状況把握と早期防除徹底。 ・株元に薬剤が十分付着するような薬剤散布の徹底。 ・箱施薬剤の適正量及び適正時期の使用。
果樹全般	カメムシ類	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的にはカメムシの発生量は少なかったが、地域や園地によっては被害が見られ、カンキツでは落果被害の生じた園地もあった。 ・フェロモントラップ及び予察灯の誘殺量について、調査地点間で差が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発生量が全般に少ない場合は、予察灯やフェロモントラップの誘殺数が少なく推移するため、発生動向を把握できないことが懸念される。 ・離脱時期は予測式によって推定可能であるが、きゅう果の劣化が早い場合に予測よりも早まることが推測されるが、その程度は経験的に判断せざるを得ない。
トマト、キュウリ、アスパラガス	タバココナジラミ(バイオタイプQ)	<ul style="list-style-type: none"> ・トマト、キュウリ及びアスパラガスが同一地域で栽培されている地域においては、コナジラミの発生環を断ち切ることが困難である。 ・島嶼部でもバイオタイプQの発生が主体となってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生産組織によってはトマト黄化葉巻病耐病性品種の導入も進みつつある。感受性品種と混在した地域で防除対策が不徹底にならないようにする必要がある。 ・薬剤感受性のモニタリング

農作物名	病害虫名	問題点	対策
イチゴ	炭疽病	<ul style="list-style-type: none"> ・ランナー切り離し等の作業遅れや発病株の除去など基本的な防除対策が不十分な圃場がある。 ・一部の品種では汚斑状斑点が出にくいため感染疑い株の早期除去が困難である。 ・発病株の除去が不十分な圃場では育苗期後半の降雨により発生が増加した。 ・高齢者や経営基盤の弱い生産者を中心に雨除け施設や高設育苗施設の導入が困難となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新規有効薬剤の登録 ・基本的防除対策の更なる徹底 ・雨除け施設の導入推進 ・炭疽病発生予察調査基準の策定と潜在感染株調査(エタノール検定)を活用した情報提供 ・新規導入品種での発生特性に応じた防除対策の確立
キュウリ	黄化えそ病 (MYSV)	<ul style="list-style-type: none"> ・ミナミキイロアザミウマに効果の高い薬剤が少ない。 ・栽培終期の防除不足と栽培終了後の蒸し込み処理の不徹底。 ・施設内の通気性悪化への懸念から防虫ネットの導入が進みにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミナミキイロアザミウマの薬剤感受性モニタリングによる効率的防除の推進 ・効果の高い薬剤の登録促進 ・スワルスキーカブリダニを活用した防除体系の検討